



松岡早紀。それが私の名前だ。

読み方はマツオカサノリ。マツオカサキ、では断じてない。

初対面のひとは九十九パーセントの確立でサキと読む。その度に私はサノリと訂正しなくてはならない。これはなかなか面倒な作業である。だが、初対面ならばいたし方ないとも思う。だから別段私は人々が私の名前を呼び間違えることを不思議と思わないし、そのことに腹を立てるなどという無粋な真似はしない。

しかし、それが家族となると話は別だ。腹を立てることはないが、違和感を感じてしまうのは仕方がないことだと思う。

私のただ一人の兄は、私のことをサキと呼んだ。そう呼び続けた。母も私も内心では困惑していたが、私たちは気づかぬふりをした。

私の兄は、賢者であり愚者であった。

私とひとつ違いの兄は、幼い頃より勉学に熱心に励んでいた。いや、熱心に励むなどという生易しい表現は兄にはふさわしくない。彼は、恐らく勉学にとりつかれていたのだと思う。

「ぼくは、きわめられるかぎりの智をきわめる」

彼がそう高らかに宣言したのは、幼稚園の卒園式の帰りのことだった。

幼稚園の頃の記憶などほとんど残ってはいないが、このときのことだけはよく覚えている。

兄と私と手を繋いだ母は、にこにこ笑いながら実に嬉しそうに兄を応援していた。当時年中組だった私は、ただふんと相槌をうっただけだった。要するに母も私も、本気で相手にしていなかったのだ。まだ「智」という漢字すら知らないような幼子の言うことだ。本気で相手にするだけ無駄だというものだろう。

しかし小学校にあがると同時に、兄は勉強に取り組むようになった。

それは異常だった。

普通、小学生といえば、勉学よりも遊びに夢中になるものである。

遊びが彼らにとっての勉強であり仕事であるといっても過言ではない。

しかし、私のただ一人の兄は、毎日毎日、同年代の子どもたちと遊ぶ間も寝る間も惜しんで、机に向かった。一体いつ眠っているのだろうと家族が心配になるほど、彼は朝早くから夜遅くまで机に向かい続けた。恐らく、一日二時間も寝ていなかっただろうと思う。一日二時間しか睡眠時間をとっていなかったといわれるナポレオンもびっくりだ。

学校での授業時間や食事の時間、わずかな睡眠時間を除いて、兄は勉強し続けた。お風呂に入っているときさえ、兄は録音しておいた早朝のラジオ番組を流して勉強していた。英語はもちろん、フランス語、中国語、ドイツ語など、私にとっては宇宙人が話しているとしか思えない異国の言語を、兄は真剣な表情で聞きながらぶつぶつとシャドーウィングしていた。

小学校を卒業する頃には、兄は大学卒業生と同程度の知識を、その小さな頭に秘めていた。

戯れに解いた赤本を予備校の教師をしていた叔父に添削してもらったら、なんとほぼ満点に近い点数をとり、周りの者を仰天させたものだ。それは、東大の過去問だった。しかし添削してもらった答案用紙を受け取り、点数を目にした兄が不服そうな表情を浮かべたのを私はよく覚えている。満点でなかったことが不満なのだと、私にはすぐ分かった。

兄は一応都内で一番といわれる私立中学校に進学したが、それは妥協してのことだった。

彼は小学校を卒業したらハーバード大学に入学したいと母に言っていたのを私は知っている。しかし日本には飛び級制度などないし、なによりうちにはお金がなかった。父の入院費のため、家計はかなり苦しかったのである。

母は頼むから普通の中学生として普通の日本の中学校に行ってくれと兄に泣いて懇願していた。だから兄は渋々ながらも承知して、日本の中学校に進学したのだった。母があそこまで取り乱してわが子に懇願するのを見て、私はショックだった。しかし母の気持ちが分からなくもない。私としても、兄に普通の子どもになってほしかったのだ。

私から見ても、兄は異常だった。

兄の世界は勉強で成り立っており、勉強で完結していた。兄にとっては、勉強が全てだった。

兄は、母と私、そして予備校の教師をしていた叔父以外の人間とは、ほとんど接触しなかった。

当然のことながら兄には友だちが一人もいなかった。だが兄のことを知らない者は、小学校でも中学校でも、恐らくひとりもいなかったと思う。兄はとにかく有名だった。

父は、私が無邪気な幼稚園児だった頃から既に病院に入院していた。昔交通事故に遭い、植物人間状態になってしま

ったのだ。当時まだ無邪気な幼稚園児であった兄がふざけて道路に飛び出し、車に引かれそうになったところを、父が庇ったのだと言う。それ以来、父は物言わぬ肉塊となりはててしまった。しかしたとえ意識がなくとも、大切な父であることには変わりはない。母と私は、熱心に見舞った。兄は、最初の頃はよく母に連れられて見舞ってはいたが、小学校高学年になった頃には、一年に二、三度くらいしか病院に向かわなくなってしまった。

兄が勉強に異常な執着を見せ始めたのは、あの交通事故がきっかけだったのかもしれないと、今になって思う。今思ったところで、既に全てが遅すぎるのだが。

私も兄ほどではないが勉強はそこそこできるほうであったので、兄と同じ高校に合格した。恐らく、合格できたのは兄のおかげだと思う。高校を受験するにあたって、兄は私の専属家庭教師となってくれていたのだった。兄のヤマは恐ろしいほど当たった。

受験問題に、兄が予想した問題がことごとくでてきたのには、喜びを通りこしてむしろ恐怖を感じた。もしや、兄は裏で高校の教師たちから問題を横流ししてもらったのではないかと疑わざるを得なかったほどだ。しかし当時の兄は、何より不正や犯罪を嫌っていたから、その可能性は全くなかった。

兄は確かに異常者ではあったが、母や私に対してはとても優しくかったし、何より健全で純粹で誠実で正直であった。あの勉強に対する異常な姿勢を除けば、母にとっては恐らくこの上なく素晴らしい自慢の息子であっただろうし、私にとってもこの上なく素敵なお兄さんであっただろう。

しかし兄が異常者であることに変わりはないのだ。

高校の合格発表の日、私は自分の番号が掲載されているのを発見すると、同じ高校を受験した友だちと目一杯喜びを分かち合ってから、母と兄の携帯にそれぞれ電話した。もちろん学校の先生にも電話した。

母はそのとき仕事ではあったけれど、喜びのあまり涙ぐんでいるのが電話越しにも分かった。母は涙もろいのだ。次に、兄に電話すると、兄もまるで自分のことのように喜んでくれ、「流石サノリ。我が妹」と誉めてくれた。この時の兄は、まだ私の名前をちゃんと正しく呼んでくれていたのだ。兄に誉められたのが、私にとっては一番、嬉しかった。その時の私は、一般の東大生よりも頭が良くて、優しい兄が大好きだったのだ。

「ところでサノリ、今日父さんのところに行くのか？」と兄が尋ねてきたので、私はうんと返事をした。たとえ意識がなくとも、父は生きている。父は大切な家族の一員だ。この喜びを報告しないなんて親不幸者だ。学校に連絡をした後、すぐに病院に向かうつもりだった。

兄はそうか、と呟き、後で夕食をしてから一緒に病院に行こうと明るい声で言ってから電話を切った。兄が外に出ると言い出すのはとても珍しいことだったので、私は浮き足だった。普段、図書館や書店、学校に行く以外、兄は滅多に外に出たがらないのだ。

この時の私は愚かであったと言わざるを得ない。

私は気づくべきだったのだ。たった一人の妹として。兄の小さな変化に。

本当に、気づかなければならなかったのだ。

私は暫く書店で時間を潰してから、約束の時間に病院近くのイタリアンレストランに入った。

席に案内されて暫くメニューを眺めていると、十分程遅れて兄が入ってきた。兄は私を見つけると、すぐに満面の笑みを浮かべておめでとうと言ってくれた。兄は私の向かい側に腰を下ろした。

若いウェイトレスの視線がちらちらと兄に向けられるのを感じ取っていた私は、内心得意だった。兄は頭が異常なほどいいだけでなく、見た目もずば抜けて整っているのだ。外に出たとき、何度かスカウトされたこともあるくらいだ。だから私は、どこか異常があっても、兄のことが大好きであったし、自慢でもあった。

この時は、まだ。

パスタを食べ終わってそろそろ病院に行こうと席を立とうとすると、兄は私にデザートを進めてきた。今日くらい自分を甘やかすのが当然なのと言い張る兄に、私は素直に頷いて喜んでデザートを追加注文した。デザートが運ばれてくると、兄は急に思い出したように家に携帯を忘れてきたと言って、一旦取りに帰ると言い出した。

別に病院に見舞いに行くだけなのだし、携帯くらいいいじゃないかと私は言ったが、兄は何故かその時携帯がいるのだと言い張って、さっさと席を立ってしまった。

自分が戻ってくるまで私にここで待っているように言い残して。

家は病院から歩いていける距離であったので、まあそんなに時間はかからないだろうしいいかと思って私は大人しく兄を待っていた。兄はじきに戻ってきた。お待たせと言って私に笑いかけてくれたが、その時私はすぐに笑い返すことができなかった。

店に入ってきたとき、兄の顔がやけに真剣だったのを、目にしていたからだ。

それは本当に一瞬のことだったけれども、やけに鮮やかに印象に残っていた。

その顔が、兄が難問に直面したときの表情とまるきり同じだったから、きっと印象に残ったのだろうと思う。自分の勉強に集中しているときの兄は、とても近寄りたがりオーラをまとっていた。そういうときの兄は、まるで私たちとは違う世界の住人であるかのようにだった。

兄と共に歩きなれた病院内の白い廊下を歩き、二階にある個室に向かう。

父には個室があてがわれていたのだ。

ドアを開け、先に病室に足を踏み入れたのは、私だった。入った瞬間、どこか違和感を感じたが、その違和感の正体を自分で突き止めることはできなかった。

その時の私は高校に無事合格したことでひどく浮かれていたから、鈍感になっていたのかもしれない。ベッドの傍に寄って行って、いつものように気軽に話しかけた。その時も、どこか変だと思っていたが、それが何かは分からなかった。私の背後に立っていた兄が、声を上げるまでは。

父は、本当の物言わぬ肉塊になっていた。

私は一日のうちに、幸福と不幸を同時に味わったことになる。そしてその不幸は、ただの不幸ではなかったのだ。

お通夜は速やかに執り行われ、お葬式の詳細もあれよあれよという間に決まった。恐らく、母も親戚も皆、この日が近々来ることを覚悟していたのだろう。お葬式は、母の希望で家族葬となった。

母は決して取り乱したりはしなかった。病院からの連絡を受けて、呆然とする私の元に仕事場から駆けつけたときも、お通夜のときもお葬式のときも、私たちの前では一粒も涙を零しはしなかった。黒い服に身を包んだ母は、高貴な身の女性であるかのように途方にくれた私の目に映った。

お葬式があった日のことは、よく覚えている。正確に言えば、お葬式があった日の夜のことを、よく覚えているのだ。

。忘れられるはずがない。何故なら、あの夜が恐らく、決定的な日であったのだから。

その夜、私は兄の部屋に行った。

なんとなくその夜を一人で過ごすのが嫌で、兄に傍にいてもらおうと思ったのだ。兄はすぐに勉強の世界にのめりこんでしまうのはわかっていたけれど、たとえ兄の心が異世界に飛んでしまったとしても一人でいるよりははるかにましだとその時の私は思った。

兄の部屋に入ると、部屋に電気はついてはいたが、兄はいなかった。それは当然だ。その時兄はお風呂に入っていたから。

私は一旦兄のベッドにぼふんと腰を下ろして足をぶらぶらさせてみた。その後兄の本棚に並ぶ分厚くて難解な本を適当に手にとってぱらぱらと捲ってみたりした。しかし人並みの知能しかもたない私にはちんぷんかんぷんだったから、すぐに飽きて元の場所に戻した。

ふと思い立って、兄の机にむかってみた。

閉じられたノートパソコンを開いてみると、ぴかぴかと青いランプがついていた。スリープモードにしていたのだ。

私はスイッチを押して、転寝をしていたパソコンを起した。寝起きの良いパソコンは、すぐに起き出してパスワードを入力するよう私に促してきた。

私の指は自然に動いた。

ロックがあっさり解除された。

Faust——それがパスワードだった。

そして画面を見て、私は眉を寄せた。ざっとスクロールして、開かれていたファイルを全て簡単にチェックした。

いくつものWebファイルは、全てひとつのテーマを私に向かって投げかけていた。

何だかどくどくと心臓がうるさかった。

胸がざわついた。

嫌な予感がした。

よく分からないが、とても嫌な気分だった。

これは、何だ。

これは、これは、これは。

一体、何なのだ。

その時ドアがいきなり開かれて私はぎょっとして振り返った。見なかったことにはできなかった。

全ては遅すぎた。

半乾きの頭にタオルを被せた格好で、兄はそこに立っていた。

その時の私は、ともすれば暴走しそうな悲鳴を口内に押し込めるのに必死だった。

兄は無表情だった。

その端整な顔には、何の表情も浮かんではいなかった。

虚ろな目がひたと私を見据えていた。ただただ、気持ちの悪い恐怖が私を内側からぎゅうぎゅうに締め付けた。

どのくらい私たちは見つめあっていたのだろうか。それは一瞬のことも思えるし、逆に果てしなく長い時間のようにも思われた。

不意に、兄が微笑んだ。それは、いつもの優しい兄の微笑みでありながら、同時に誰か見知らぬ人間の微笑みであるようだった。いや、何か見知らぬイキモノの微笑みであった。

「見たんだね」

優しく、まるで幼い子に話しかけるような口調で兄が言葉を発した。問いではなく、断定口調だった。その言葉の背後に隠れて、もうひとつの言葉がこちらを窺うように覗いているのが、私には分かった。

——気づいたんだね。

「どうして泣いているの？」

無意識のうちに、涙が一筋、目から流れていた。

兄に指摘されて、私は初めて自分が泣いていることに気づき、慌てて、しかしのろのろと涙を手の甲で拭った。

この時ほど、自分が馬鹿であったら、と願ったことはないだろう。

この時ほど、兄が智を極めようとするその行いを止めなかったことを後悔したことはなかっただろう。

「お前は僕に似て賢い。僕はお前のことを、誇りに思うよ」

兄はゆっくりと私に近づいてきた。私は逃げるができなかった。ただ、まるで幼子のように椅子に無防備に座り込んで泣きじゃくっていた。

私の前に立った兄は、私の頭にそっと手を置き、優しく撫でてくれた。

その手は本当に優しく、温かかった。

純粹で、無垢だった。

この同じ手で、実の父を殺したとは思えないほど。

兄は、智を追及するあまり、ついに死の領域にまで、ふみこんだのだ。

「僕はファウストなんだ」

兄は柔らかい笑みを浮かべたまま、言った。そして私の頭をそっとかき抱いた。

「瞬間よ止まれ、汝はいかにも美しい」

この時から、兄だった男は私のことをサキと呼ぶようになった。

もちろん私は彼の犯した罪を誰にも言うことはなかった。彼は相変わらず机に向かい続け、母と私は相変わらずそんな彼の後ろ姿をどこか心細い想いで見つめながら、そっとしておいた。

母も、あのお葬式の日以来、いや、もしかしたらもっと前のことだったのかもしれないが、とにかく、それ以来、自分の息子がどこか変わってしまったことに気づいていたようだった。しかし母は何も言わなかった。だから私も何も言わなかった。

私は何事もなかったように学校に通い、友だちと遊び、適度に勉強をした。「兄」にも、今まで兄に接してきたのと同じに接した。「兄」の方も、何事もなかったかのように私に兄と同じように接した。

そうして時は経ち、桜が咲く季節がめぐってきた。

「兄」は当然のことながら東京大学を受験し、合格した。母も私も、心から彼を祝福した。親戚も皆、祝ってくれた。

「兄」は、笑ってはいたけれど、特別嬉しそうでもなかった。彼にとっては、もはや東京大学に入学するという事など、どうでもいいことだったのである。むしろ、やっと入学できたかと思っているようだった。

下宿先はとうに決めてあったので、引越しの準備もつつがなく完了した。母と私は叔父の助けも借りて、「兄」の引越しを手伝った。引越しを無事完了して地元に戻るという日、「兄」は私の耳に顔を近づけて、夏休みに遊びにおいでと言ってくれた。私は素直に頷いた。

そしてその年の夏休み。全ては遅すぎたのだと私は悟ることになる。

私は一人新幹線で東京に赴き、「兄」の住むアパートに向かった。二泊する予定だった。「兄」は柔らかな春の日差しのような微笑をたたえて私を迎え入れ、家賃のわりにはこじんまりとした部屋で、他愛のない話をした。穏やかな時が流れていたが、今から思えばあれが嵐の前の静けさというものだったのかもしれない。

その時の私は、「兄」は東京に出てきても変わらなかったのだなと思った。それがとても悲しかった。最期の希望を断ち切られたかのような気持ちを味わっていた。

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、「兄」は東京に出てくる前よりも優しくなったように思う。

いつもみたいに話を途中で切り上げて勉強に戻ることはせず、私とのちょっとした会話にいつまでも花を咲かせてくれていた。私は少し訝しく思ったが、別に特別不思議に思うこともなく彼の話に耳を傾けたり、彼に近況を語ったりしていた。

しかし、夕方になっても「兄」が机に向かう気配がないことが分かったと、流石にこれはおかしいと思い始めた。

「兄」はこたつ机を挟んで私と向かい合ったまま、柔和な笑みをたたえて会話を交わし、ちらりとも机の方を見なかった。それは、地元に行ったときの「兄」にはありえないことだった。地元に行った頃、「兄」は十分と勉強から離れることができなかったのだ。

違和感で溢れんばかりになった心をもてあましながら私がそわそわしだすと、「兄」は不思議そうに小首を傾げながら私にどうしたのかと尋ねた。恐る恐る勉強のことを匂わせてみると、どうしたことか、彼はおかしそうに笑った。そして、勉強はもういいんだ、とおよそ彼の口から出るとはとても信じられない言葉がぼんと飛び出した。

一瞬、幻聴かと思ったほどだ。

まじまじと彼の端整な顔を見つめていると、「兄」は不意に真顔になって、もう一度同じ言葉を繰り返した。やはり、聞き間違えでも幻聴でもなんでもなかったようだ。

どうして、と尋ねると、「兄」は再び微笑んだ。そして、その私の質問に答えを出すことはなかった。永久に。

彼は徐に立ち上がって、机をまわりこんできた。

そしてぼんやりと彼を見上げていた私の顎にそっと手をかけると、触れるだけの軽いキスをした。私は全く抵抗しなかった。抵抗する気もおきなかった。

ただ、嗚呼、と思った。

嗚呼、私の兄はもう、本当にこの世界のどこにもいないのだな、とこの時確信したのであった。

そして「兄」は何も言わずに部屋を出ていった。

私は彼に、どこに行くの、とも、何しに行くの、とも聞かなかった。そんな間抜けな質問を投げかけるような馬鹿な真似はしなかった。ただ、黙って床に座り込んでいた。そうするしか、なかった。

出ていくとき、「兄」は私に背を向けたまま一言だけ言葉を発した。それは、そう。あの言葉だった。兄が、悪魔メフィストーフェレスに魂を捧げたという証であるあの詞。

「兄」は、智を追及するあまり、死の領域にまで、ふみこんだのだ。それは兄と一緒にだった。生きながら、死とは何かを知るために実の父を手にかけて私のただひとりの兄と。ここで漸く、私は「兄」もまた兄だったのでああと気づいたのであった。

この日を境に、兄はこの世界から姿を消した。

FIN